ホテルのバスマット。

ると、ラムの尻肉に薄い衣を着けて油で焼き、タマネギの炒めたものを乗せて改めてオーブンで焼いたような感じだ。不味くはなかったものの、もう一度食べてみたいとは思わない。

この日は土曜日だったせいか、食事に立ち寄る客や、脇を通りすぎる人が前日などより多い。しかしそれでも雑踏などとはほど遠い状態なので、寛いで食事できることに変わりはなかった。むしろ西瓜に振りかけた塩が甘味を引き立てるように、長閑さをより実感できたかもしれない。1時間以上掛けて食事を堪能し、最後にコーヒーで締める。

勘定はムール貝4.5Lv(247円)、アンチョビー5.5Lv(302円)、ガーリックトースト0.5Lv(27円)、ランプステーキ9.9Lv(544円)、赤ワイン14Lv(769円)。サービス料が10%加算されたが、三日連続できて、何となく親しみを感じていたので、心中で別れを告げながら、10Lv(549円)チップを置いた。ちょうど客が途切れていたこともあったのか、勘定が済むとオヤジはノートを持って席に来ると、日本語の接客用語を何か教えてくれと云う。ごく基本的なのであれば知っているだろうから、「ドウゾ、ゴユックリ。」を怪しげな英語解説と共に伝えた。

宿へ戻ってしばし午睡を取った後、明日行こうと思っているヴァルナに備えるためフロントへ降りた。まず英文ガイドで目星を付けた宿の予約を頼み、これはブルガスと異なり最初のところであっさり決まった。ネセバルのような観光地ではないため、逆にシーズンオフ休業もないようだ。

次にバスの乗り場を訊いた。旧市街外れが始発点であることは一昨日確認したが、ブルガスからのバスがこのすぐそばで停車したように、ヴァルナ行きも付近に停留所があるはずだ。ところが思わぬ答えが返ってきた。ヴァルナ直行バスはシーズン中のみの運行で、今の時期はサニービーチで乗り換えなければならない。

始発点ではないバス停で待つのも不安が多く嫌だったのに、乗り換えが必要と聞いてタクシー利用を考える。おおよその料金を尋ねると、タクシー会社に電話して100Lv(5,492円)くらいと教えてくれた。これならば快適さや安心感から支払う価値は充分あるし、「取材」と云う意味でも利用してみたい。

5. ヴァルナ(Варна)

タクシー

11月6日は曇天であったものの、取り敢えず降りそうな様子はなかった。10時にチェックアウトし、3泊の料金180Lv(9,885円)をカードで支払う。次いでタクシーを呼んで貰った。5分ぐらいで来ると云われる。

しかし実際には20分近く待たされる。ようやく

ヴァルナまで利用したタクシー。車はダチア・ダスター。

ダチア

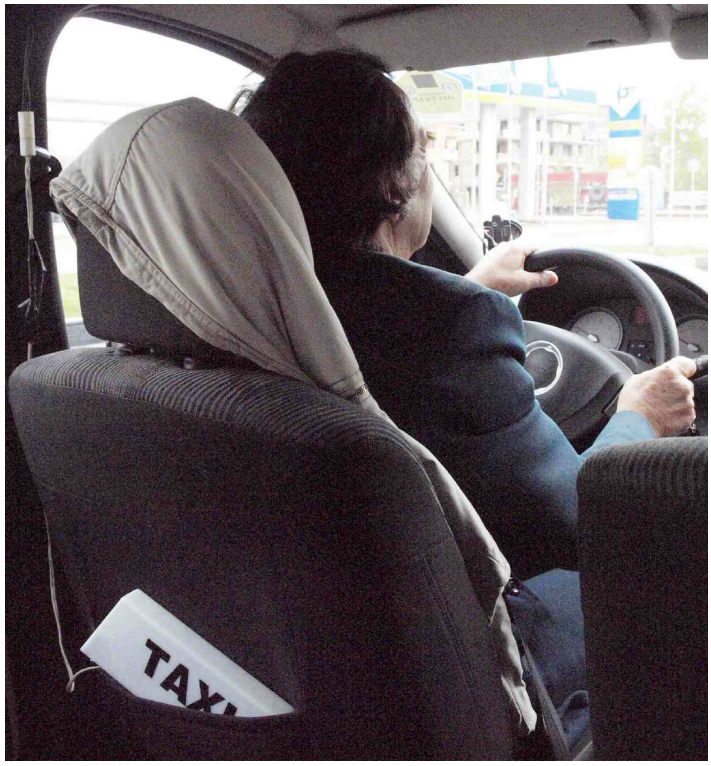
ルーマニアの自動車メーカー。社会主義時代に設立され、当初はルノーの乗用車をノックダウンしていた。

現在はルノーの子会社となっている。低価格を武器にルーマニアを含む東欧諸国や、フランス、ドイツ、スペインなどで販売されている。現在発売されているダチア・ダスターには日産・Bプラットフォームを使用。

ホテル前に停車した黄色いダチアから、50歳くらいの実直そうなオヤジがロビーに入ってきた。片言の英語で遅くなった詫びを云い、次いで思いがけない、「ガールフレンドをヴァルナまで同乗させて良いだろうか？」との要望が口をつく。

あまりの想定外に、ほとんど思考が停止したまま同意してしまった。ともかくキャリーカートを引っ張り車まで行き、荷物をハッチバックの後部に収める。助手席には既にガールフレンドが坐っていた。三人を乗せた車はヴァルナへ向けて出発する。

小型の四人乗り乗用車だが、新しい車内は快適だ。運転席の背もたれ後ろポケットにタクシーの行燈が突っ込んである。白タクではないとしても法人タクシーではない。ホテルが呼ぶにしては奇異に感じた。



タクシーの車内。

運転手は話し好きなのか、客に対するサービスと心得ているのか判らなかったが、カタコト英語を意に介さず良く喋る。名刺をくれて、この番号で呼び出せばすぐに駆け付けるそうだ。三つ番号が印刷されていて、「自分は携帯電話を三つ持っている。」と嬉しそうに話すが、何でそんな台数を持つことが必要なのか理解できない。

助手席の彼女はほとんど黙りこくっているが、後部座席からだと前方の視界を遮られるので鬱陶しい。そもそもバスよりタクシーを選んだ理由の一つに、走行中に撮影がしやすいと思ったこともある。正反対の状況が馬鹿々々しく思え、同乗することを承諾する条件として、「撮影したいから私が助手席に坐る。」ことを云えば良かったのかなど漠然と考える。

ところがそんなアイディアを実現する機会が訪れた。ヴァルナへの道半ばで運転手が、「この先のドライブインではヨーグルトを自家生産していて、質の良いものを食べられる。寄っていかないか？」と提案したのだ。本格的なブルガリアヨーグルトを試せるのは望むところだし、これを利用して席替えできるのも良い。

数百メートル行った道端に、木造で築50年以上は建っていそうな平屋があった。前がちょっとした駐車場になっている。

上：手造りヨーグルト。下：運転手とガールフレンド。

ドライブインの壁に飾られた鹿の角と古い猟銃。

運転手に導かれて店内へ入る。彼は顔馴染みらしく、打ち解けた挨拶をして、ヨーグルトを三つ頼む。これにコーヒー一杯を追加し、空いているテーブル席に坐った。しばらくして運ばれてきたヨーグルトは、透明で何も印刷されていないプラスチック容器に入り、量は(レシートによれば)500ccとたっぷりだ。

日頃は食べないヨーグルトなので、評価したり日本のものと比較することは難しいものの、何となく美味かったような気がする。

10分ほどの休憩、そして彼女がトイレを使ったりしてからドライブインを離れる。運転手は奢るつもりでいたらしいが、勘定はこちらで払う。ヨーグルト3つが9Lv(494円)、コーヒー0.6Lv(33円)、ポーションミルク0.2Lv(11円)だった。再出発時には目論見通り助手席に坐ることができた。

E87号線の道路状況。

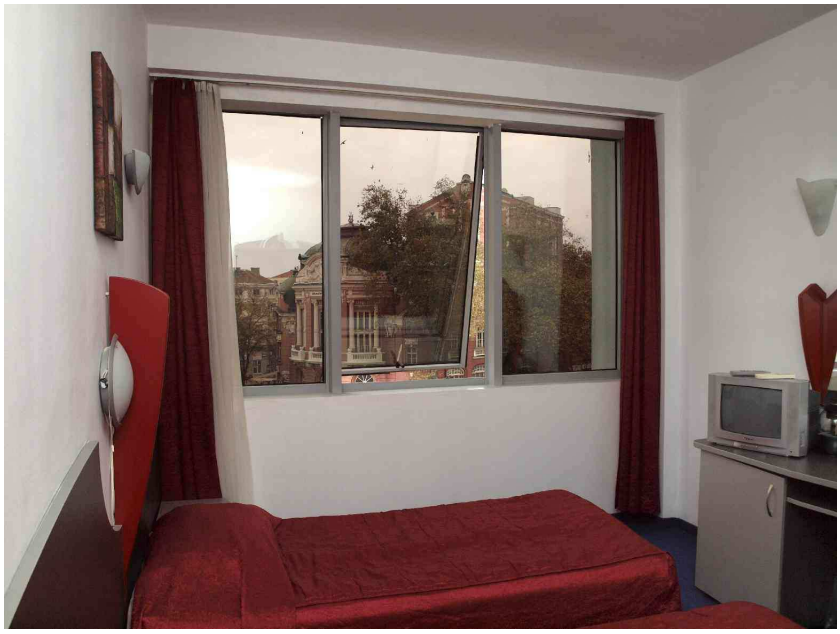
この時走ったE87号線は国際道路の一部で、ウクライナのオデッサからコンスタンツァ(ルーマニア)、ヴァルナ(ブルガリア)、ブルガス(ブルガリア)を経由しアンタルヤ(トルコ)へ至る壮大なルートだ。

自動車専用道路ではないものの、基本的に歩行者などいないし、道幅に余裕があり、見通しがよい上に交通量が少ないから、高速道路並みの走行が可能だ。郊外では80キロの制限速度標識を見るけれど、時速100キロ以上で走っていることが多かった。

道標からヴァルナが近いことが判る。今日泊まる宿の名前、City Mark と電話番号は予めメモ用紙に書き写しておいた。これを運転手に渡す。彼は三台中のどれかを取り出し、片手でハンドルを操作しながらダイアルした。

ヴァルナは市街地の南側に河口(湾口)があり、これが狭まって130メートルほどになった部分を海面から約20メートル上に架けられた橋で渡る。間もなく鉄道を跨線橋で渡ると市街地だ。さらに1キロほど行くと左手に聖母被昇天大聖堂が見える。この辺りが街の臍ともいえそうなところだ。

大聖堂を通り過ぎて数百メートルで左折する。しかしすぐに道端に停車した。電話の説明と周囲の状況が一致しないらしい。再度電話してから運転手は、「いつも女の道案内はこれだ。右折と左折を逆に云うんだから。」とぼやくのだった。この後もすんなり辿り着くことはできなかったものの、料金は定額だし、荷物を引っ張ってうろうろするのと違うから、迷走を楽しむような余裕さえあった。



シティマークの部屋と窓からの景観。

ネザーヴィシマスティ広場から見たシティマーク。ハーフミラーの窓で、下部が少し開いている部屋に泊まった。

最後は宿のオヤジが表へ出て手を振り合図してくれる。判りにくさの原因はシティマークの立地だ。車輌が入れないネザヴィシモスト広場に面し、徒歩で行く分には判りやすいところなのに、車だと袋小路のどん詰まりまで行かなければならず、進入を躊躇するような道路の雰囲気だった。

ともかく無事着くことができ、100Lv(5,492円)の料金に5Lv(275円)をチップとして足す。不要だろうとも思ったが、チップ相場である5%が275円は実感としてすごく安い。

アルメニア料理

運転手達に別れを告げホテルに入った。下見させて貰ったのは4階で広場を見おろす、シンプルだが快適な部屋だった。各階に4部屋のこぢんまりした宿だけれどエレベーターもある。これで一泊60Lv(3,295円)、ならば申し分ないと思った。

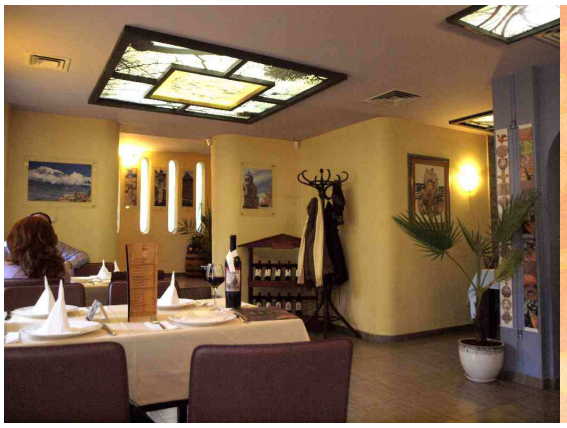
部屋に落ち着き室内を撮影したりして一息つくと12時半を回っていた。英ガイドを開き、お奨め食事処の中で特にお奨めマークが付いているプリ・モナヒナイトを目標とする。同じガイドの地図で、宿からの順路を頭に入れ食事に出かけた。

プリ・モナヒナイトを探しながら、途中で何度か英ガイドを取り出し、地図と現地を照合しながら注意深く行った。しかし該当する位置にレストランを発見できず、まさかと思いながら先へ進むと、ヴァルナ駅前に出てしまった。他に食指の動くような店もなかったので、しつこいようだが同じ道を引き返して探し直す。

良く見れば営業こそしていないものの、レストランかもしれないような建物はあった。看板もあるのだがキリル文字ばかりでとりつく島がない。明日に再訪することにして、今は他の店を探すことにした。

ヴァルナ市街平面図

プリモルスキ海洋公園の樹々が穏やかに紅葉。



Salads

Armenian salad / 300 gr. / (beef tongue, potato, onion, white sauce) ..... 5,70 lv.

Tabule / 250 gr. / (bulgur, tomato paste, green onion, greens) ..... 3,90 lv.

Salad Yerevan / 300 gr. / (cabbage, carrot, cucumber, eggs, sweet corn, spices) ..... 4,90 lv.

Russian Salad (Olivie) / 300 gr. / (potato, carrot, pea, ham, eggs, pickles, mayonnaise) ..... 4,50 lv.

Capreze / 300 gr. / (mozzarella, tomato, Pesto sauce) ..... 6,90 lv.

Caesar salad / 300 gr. / (green lettuce, tuna fish, crusts, eggs, olive, Caesar sauce) ..... 6,60 lv.

Shopskiy salad / 300 gr. / (tomato, cucumber, onion, feta, olives) ..... 3,90 lv.

Iceberg / 300 gr. / (green iceberg, chicken, tomato, Parmesan cheese, sweet corn) ..... 6,90 lv.

Sea salad / 250 gr. / (pink herring, potato, onion, olive) ..... 5,90 lv.

Vegetable dish (for four people) / 1200 gr. / (tomato, cucumber, greens, feta) ..... 13,80 lv.

Olives / 100 gr. / ..... 2,20 lv.

Salad Fiancee (pinapple, cabage, chiken, mayonnaise) 5.50 lv.

左：その名もレストラン・アルメニアの店内。右：お品書きのサラダ部分。12種類と多いのはアルメニア料理の特徴と云うより、ブルガリア食堂の一般的傾向。それぞれの重量が記載されているのも同じく。

意に染まる食堂が見付からないまま、ネザヴィシモスト広場近くまで戻ってしまった。先ほど歩いたときは逆向きだったので気付かなかった、アルメニア料理店の案内看板が電柱に縛り付けてある。

料理と店内の写真があり、これに食指が反応した。しかしアルメニアがどこなのか、どんな料理を供するのかさっぱり判らない。それでも成り行き任せで試してみる気になった。

執筆に当たりアルメニアを調べると、黒海とカスピ海に挟まれた地域（ただし海には接していない）で、西アジアと云うことらしい。この国の出身者で日本人に一番馴染みがあるのは、「剣の舞」作曲者、アラム・ハチャトゥリアンだろう。

閑話休題。看板には矢印があり、50メートルと書いてある。それに従い行くと、曲がり角に同じような看板があり、今度は30メートルになった。導かれるまま無事にレストラン・アルメニアに辿り着く。

時刻は既に2時近かったので、閑散とした店内にカップルが一組いるだけだ。食後なのかあるいは喫茶に立ち寄ったのか、カップだけを前に置いて話をしていた。

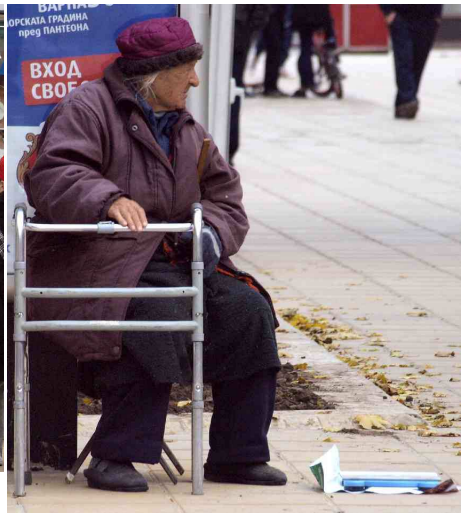
奥のテーブルに席を占めると、女将風の女性が英文お品書きを差し出した。サラダ類のトップにアルメニアサラダがある。素材は牛タン、ジャガイモ、タマネギ、ホワイトソースで無難だし、「アルメニア」に表敬してこれを選ぶ。メインはバーベキュー類が7種類あった中から、マトン（の胸肉）にした。アルメニアとかブルガリアならば何となくマトンが美味そうだ。

ワインは値段をみてサイクルの赤にした。アルメニア産ではなくブルガリアのものだ。ラベルには自転車に乗った肥大漢の絵が描いてあり、ピノ・ノワールの表示もあった。

ワインとサラダで食事を開始する。サラダは癖もなく食べやすく、ワインもごく無難なものだった。20分ほど遅れてマトンのバーベキューが運ばれてくる、一つが50グラムぐらいありそうな肉塊を串刺しにし、遠火の強火でじっくり焼き上げたような感じだ。「これがアルメニア料理か。」と、勝手に納得する。

上：アルメニアサラダ。下：マトンのバーベキュー。

茹でたスイートコーンを商う屋台。プラスチックの使い捨てカップによそってくれる。屋台の前面に調味料や香辛料が並び、客が好みを云うと振りかけてくれる。



体重計屋。1回量っていくら払うのだろう？

野菜市場。朝ならばもっと賑わうのだろう。

ベビーカーを押した4人の家族連れが来店する。食事ではなく喫茶らしいが、表のテーブルに席を占めた。かなり寒いだろうと訝しく思ったら、喫煙者がいる一方、ここは室内禁煙なのだった。食事中に煙い思いをせずに済んだのは有り難い。

1時間ほどでミルクコーヒーを最後に食事を終える。勘定はサラダ5.7Lv(313円)、バーベキュー17.3Lv(950円)、ワイン16.8Lv(923円)、コーヒー1.5Lv(82円)、ミルク0.3Lv(16円)。サービス料は勘定に入っていなかったので、釣りの小銭をテーブルに置く。

店を出てヴァルナ散策を開始した。明日が丸々使えるから急ぐ必要は無いけれど、宿で昼寝をする気にもならず、これといった当てもなく街の風景を眺めながらの漫ろ歩きだ。

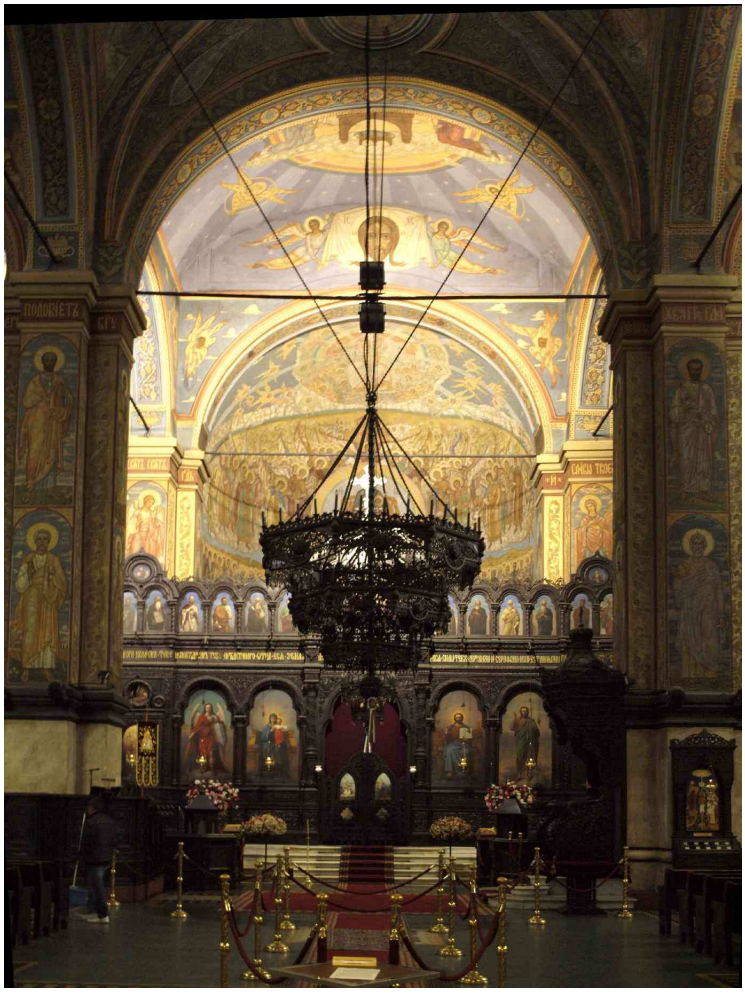
宿の前に広がるネザヴィシモスト広場には、日曜日のせいか人通りが多く、屋台店や物売り、体重計を前に置き、通行人に量らせて幾ばくかの料金を受け取る体重計屋などがいた。広場を北西へ横切ると、オペラ劇場が小振りながらもそれらしく優美な姿で建っている。

もう少し進むと、E87号線から繋がっている交通量の多い道路にぶつかる。先ほどタクシーで通過した道だ。正面に聖母被昇天大聖堂が聳えている。ブルガリアではソフィアにあるアレクサンドル・ネフスキー教会に次ぐ二番目の規模だそうだ。

中を見る。入り口に、撮影は有料許可制と表示されていた。ソフィアの聖ネデリャ教会同様の蝋燭などを売るブースで料金を支払う。カメラを見せて撮影したいことを伝え、料金の6Lv(330円)を支払うと、手書きの領収書をくれた。

天井ドームが高く、全体に荘厳な雰囲気が漂うものの、壁画やステンドグラスは上質と思えない。

ヴァルナに限ったことではなく、ブルガリアの教会にそれほど素晴らしいものはない。1878年にオスマントルコ帝国から解放されるまでは、一応キリスト教も容認されていたものの、何かと不自由だったはずだ。そして解放後も、ブルガリアにそれほどの富が集中するようなことはなく、教会建設に多大な費用をかけることはできなかったものと理解する。



聖母被昇天大聖堂のイコノスタシスと至聖所上部のドーム。

イコノスタシス。

野菜市場の隣でクルミを売っていた。いかにも自宅付近の林で収穫したものを、手作業で処理したような感じ。、

それでもイコノスタシスに掲げられたイコンは質的に素晴らしいようだ。日ガイドによればマケドニアの職人が製作したという。ただ個人的にはなぜかイコンが好きになれない。そんなことで大聖堂内にいたのは10分ぐらいだった。

ネザヴィシモスト広場の裏手にある青空市場を覗いてみる。午後のせいか閑散としていた。場外にちょっとしたスタンドを設け、近郊農家が副業をしているのかと思われるようなところで、晩酌ツマミ用にクルミを買った。1カップが1Lv(55円)。この辺りで散策にも飽き、宿へ戻る。

プリモルスキ海洋公園とプリ・モナヒナイト

11月7日の朝、目を覚まして窓辺に行くと、眼下のネザヴィシモスト広場には薄く霧が漂い、上空全面も明るい灰色の雲に覆われていた。

8時に朝食を摂りに、宿と同経営の1階にあるカフェへ降りた。8人くらいが店のあちらこちらにいて、雰囲気からすると常連が多いけれど泊まり客はいないようだ。

カウンターの端に席を占め、ルームキーを見せると、カウンターに置いてあったお品書きを渡される。モーニングメニューから適当に選べということらしい。しかし老眼鏡を持参しなかったため、あれこれ品定めは放棄してトーストとミルクコーヒーを注文する。

街へ出たのは9時半近かった。二日間メールをチェックしていないので、まずはインターネット・アクセスポイントを探した。英ガイドに載っているフラッグは地図に示されているとおり、ネザヴィシモスト広場の向かいで見付かったものの、休業したか廃業でドアを閉ざしている。

次に目指したインターネット・ドームは、苦労して見つけ出したけれどPCが日本語を表示できない。一応スタッフに訊いてみたが、店番のネエチャンはPCに関する知識などまるっきりないようで此処も駄目だ。英ガイドに載っているのはこの二ヶ所だけなのでメールは諦め、明日乗る列車に関する情報収集に駅へ向かう。

ネザヴィシモスト広場向かいの建物頂部。

ヴァルナ駅に停車中のソフィア行き列車。

ネザヴィシモスト広場から南へ下る緩い坂道がある。4、5分行くと前方に高さ30メートルほどの時計塔が見えてきた。もう少し近付いてみると、駅舎の一部だ。

鉄道と平行する交通量の多い道路を地下横断歩道で渡り、駅舎に入る。コンコースには案内所もあったけれど、ともかくプラットフォームに出てみた。ソフィアから利用したのとそっくりな、年期が入って薄汚れた機関車と、それに連結された5両の客車が停車している。

最後尾から先頭の機関車まで歩きながら観察する。一等車も一両、そしてビュッフェと書かれた車輛もあった。しかし一等車はともかく、ビュッフェは食指が動くようなものではない。

コンコースに戻り、案内所で明日ヴェリコ・タルノヴォへ移動するに際し、利用できる列車を訊いた。幸い英語は通じ、こちらが差し出した紙に、利用可能な全部で3本の列車に関する、発車時刻と到着時刻、さらに乗り換え駅での接続時刻まで書きだしてくれる。

午前11時丁度発の列車ならば、向こうへ着くのが午後2時51分で、これを利用することにした。先ほど観察したのがこの便で、ソフィア行きの列車だ。

もう少し駅を見て廻る。待合室兼売店の片隅に、インターネットとゲームができるらしい機械が一台据えられていた。キオスクで訊いても、英語が通じなかったので以下は推測をかなり交えたシステムの概要だ。

インターネットとゲームマシン。

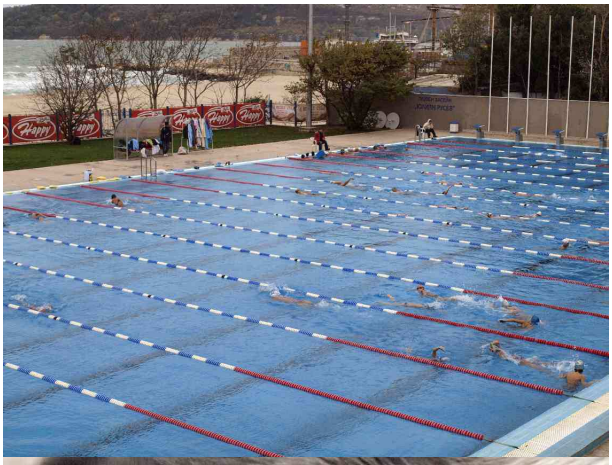
キオスクで数種類のプリペイドカードが販売され、それを機械に挿入すれば利用できる。ブルガリア全土のキオスクで、このカードは使用できる。こんなことらしい。ちなみに、「全土のキオスク」のはずだが、この手の機械をそれ以後見かけることはなかった。

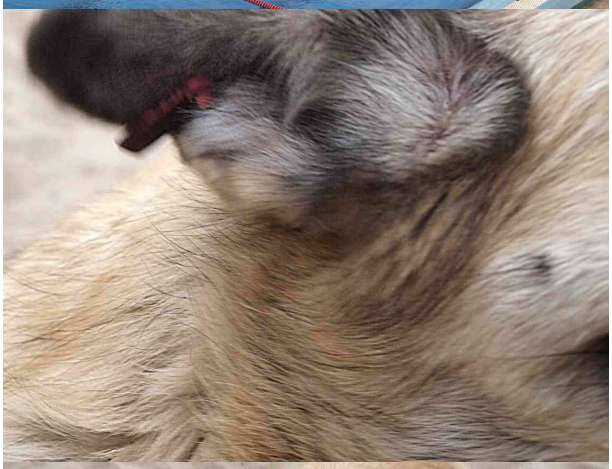
ともかくこの機械で日本語が表示されると期待はしなかったものの、どんな具合なのか取材することにした。一番安いカードを2Lv(110円)で購入し、機械に挿入する。予想通り日本語は駄目だが、英文ページならば問題ないので、こちらでの情報収集ならば充分利用価値はある。

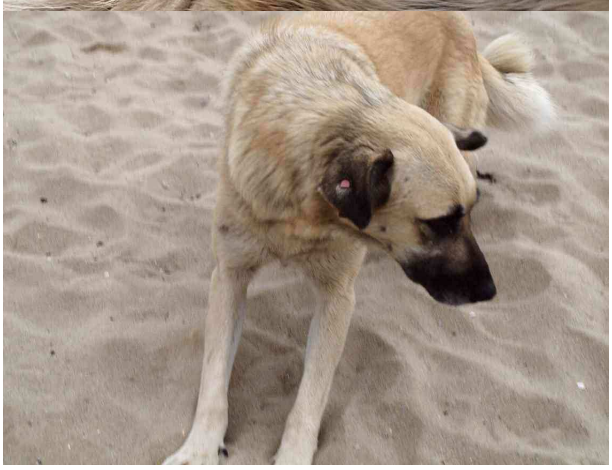
インターネットとゲームマシン用カード。原寸大。

駅を出てプリモルスキ海洋公園の方へ向かった。昨日プリ・モナヒナイトを探して歩いた道で、交通量が多く快適とはいえないものの、歩道は両側にある。全般的なインフラに関し、水準が高いとはいえないブルガリアだが、こと歩道に関し

名水の類らしい。ポリタンクに詰めて持ち帰る人達が相次ぐ。







上：野良犬の耳部分を接写。ICタグが付けられている。
下：同じ犬。

ては日本より恵まれているようだ。

プリモルスキ海洋公園の外れにスポーツクラブらしい建物があり隣接して屋外プールがあった。この日は曇り空で風が強かったせいもあり、かなり肌寒く感じていたのだけれど、プールサイドに立つコーチの指導を受けながら、大勢泳いでいる。

寒さをものともしない屋外プールの盛況が強く印象づけられた。しかしブルガリアでは屋内プールがまだ稀少なのかもしれない。この国を旅して、「貧しい」とは感じないけれど、確かに物価などは日本に比べれば三分の一ぐらいだ。結局生活全般に同じ原理が働き、屋内プールなどはまだ贅沢品なのだろうか。

昨日も一部を通過したプリモルスキ海洋公園に入り、浜辺の方へ行ってみた。夏期には海水浴客で雑踏するらしいが、今は人っ子一人おらず、野良犬が三匹無邪気にじゃれ合っていた。ソフィアやブルガスでも感じたことだけれど、この国には野良犬が多い。

ペットとして飼われる犬は少ないようで、街を歩いていて散歩させている姿を見かけるのは、日本に比べて遙かに少ない。その一方で野良犬はそこら中にいるし、それを取り締まるべきという意識もあまりないらしい。そして野良犬に餌を与えることはごく一般的に行われているようだ。

砂浜を走り回る彼等を見ていると、その耳にICタグが着けられていることに気付いた。飼い犬ではなくなぜ野良犬に？

以下はインターネットで調べた結果で、裏付けは取れないものの、それらしく納得のいく理由だ。

ブルガリアでも野犬による狂犬病の伝播など、その弊害はそれなりに問題とされている。しかしその一方でEUへの加盟を強く望み、そうなると野犬狩りを大々的にやり、殺処分などすれば、「動物愛護の精神がなく、加盟国として相応しくない。」などの意見が恐い。そこで野犬を捕まえて避妊手術を済ますと、その耳にICタグを付けて処置済みであることを明示する。

ともかく、犬好きとしてはこの国で野良犬と人間が上手く共存できているようで頬笑ましく思うのだが、住んでみればそれほど甘くはないのかもしれない。外務省からの情報としては、「都市部においても野良犬が多く、歩行中に咬まれるなどの被害が多く発生しています。狂犬病の発生も懸念されますので、万一動物に咬まれた場合には、創部の処置に加えて破傷風や狂犬病の予防接種を検討して下さい。」などがある。

それにしても不思議に思うのは、これだけ野良犬が多いのに、街路で見かける糞が、日本より遙かに少ないことだ。よく見かける清掃作業員が人力で解決しているのだろうか。

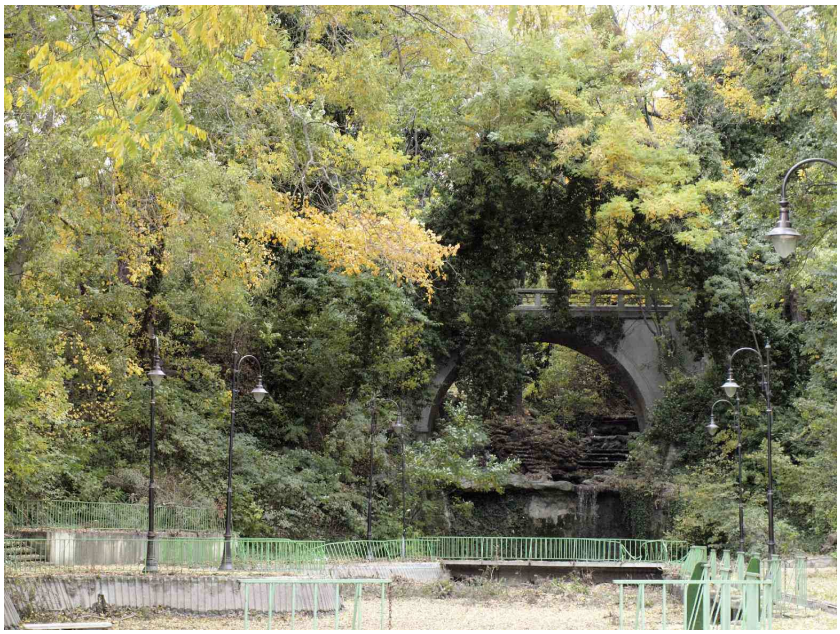
カイトボードの滑走。

視線を犬から沖の方へ転じると、初めて見るものが洋上を思いのままに駆け巡っている。遠いので詳細は判らないものの、パラグライダーの翼に似た凧状のものに風を受け、それを推進力としている。

しかしなぜそれが可能なのかは判らないが、前後左右思うままにカーブを描きながらの滑走だ。相当の熟達者が操縦しているのだろう。後刻調べたところ、カイトボードというものらしい。

公園内を海沿いに北東へ辿った。水族館やカフェなどの建物が連続しているものの、どこも休業あるいは一応内部に店員の姿が見えても、いかにも手持ち無沙汰といった感じで表を眺めたりしている。次第に公園の幅が狭まり、何となく終端らしいところに出る。これ以上行っても、見るに値するものなどなさそうなので踵を返した。

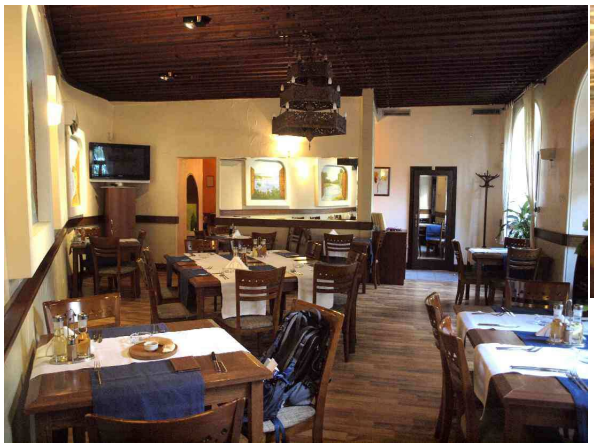
同じ公園内だが、先ほど辿った浜辺沿いではなく、河岸段丘上の道を戻る。樹々が多く、穏やかな紅葉はヨーロッパ各地に共通するような気がするが、なぜそうなるのだろうか。



プリモルスキ海洋公園の北東端付近。

公園の真ん中辺で市街外周道路を渡りプリ・モナヒナイト（При монахините：修道女達の場所で）へ向かう。昨日は閉まっていた歩道に面する鉄格子ゲートが左右に開かれ、建物へ通じる径の落ち葉をウェイトレスが掃除していた。既に営業しているのか訊くと、幸い英語が通じ、12時半からとのことだ。公園を一回りして仕切り直しする。掃除の終わった小径を通り店内へ入ると、常連らしいジイサン三人が先客だった。

プリ・モナヒナイトの門とアプローチ。



プリ・モナヒナイトの店内。

自家製パン。真ん中に香辛料の小皿。

グリーンサラダ。

英文併記お品書きから、グリーンサラダとケバブを選び、ハウスワインの赤も一本注文した。あまり待たされることもなくサラダと、自家製だというパンが運ばれてくる。パンをちぎり、真ん中に置かれた香辛料を少々振りかけてみる。色もそうだが味や香りはどことなくカレー粉を彷彿させた。カレー粉そのものかもしれない。

ワインはラベルに мавруд(マヴルッド)と書かれていた。ワインセラー名ではなく、ブルガリア独自の葡萄品種で白もあるらしい。タンニンは弱くごく僅か酸味を強いかと感じたが、私の感じだから全然当てにならない。ともかく香辛料付きパンとサラダをツマミに気持ち良く飲んだ。

ケバブ。

10分ほどしてケバブが供される。名前から焼き肉的なものを想定して注文したのだが、運ばれてきたものはシチューというか、煮込み料理だ。さっそくスプーンで一口食べてみた。美味かったしワインにも良く合うので、なんの文句もないけれど、知らない国の料理名から実物を想像する難しさを実感した。ちなみにブルガリアでも単にケバブといえば焼き肉系らしい。

1時間ほど掛けて、パンは半分残ったもののケバブとサラダは完食し、ワインも一壜が空になった。最後はこの日もミルクコーヒー。勘定内訳でパンは無料、サラダ3Lv(165円)、ケバブ12Lv(659円)、ワイン17Lv(934円)、コーヒー1.5Lv(82円)、ミルク0.3Lv(16円)。レシートを見るとコーヒーとミルクはは単価1Lvのものをそれぞれ1.5と0.3ずつ供したように印字されている。

プリ・モナヒナイトを出て、すぐそばにあるローマ浴場遺跡を訪ねた。その広さ7千平方メートルは、ローマ帝国に建設された浴場として規模的に四番目とのことだ(日ガイド)。

地図を参照しながら辿り着いてみると、正面ゲートは閉ざされ、脇の切符売り場に人の気配はない。近付いてゲートにぶら下がった札を読むと、月曜日が定休日と記されている。

見たい気持ちの薄かった浴場遺跡なので、落胆もしなかったが、遺跡の周囲に設置された鉄格子柵の間から内部を覗くことができる。遺跡はどうでも良かったが、犬好きとして柵内にいる四頭に惹かれた。一頭がゲートまで寄ってくる。この犬を撮影していると、ドッグフードを持ったオバサンが現れた。合い鍵で中に入り、犬に餌を与えてからこちらを振り返ると、遺跡を見るのなら入ることができると云った。

せっかくの申し出だし頷くと、彼女は切符売り場に入り、

ローマ浴場遺跡。

ローマ浴場遺跡。

聖アナスタシオス教会。

窓口から4Lv(220円)の入場券を差し出した。

遺跡として残っているのは、かつての浴場からすると半分以下と思われる。大浴場として温冷水の供給システムやセントラルヒーティングが備えられていたというから、それなりに説明や部分的復元などあれば面白いのかもしれない。しかし今のところ説明板1枚もなく、順路さえ示されていない。差し詰め廃墟がそのまま観客の前に投げ出されているような状態だ。10分ぐらいで場内をほぼ一周し、オバサンに礼を云って遺跡を後にした。

浴場遺跡から当てもなく数分歩いて、前方に素朴だけれど品の良い鐘楼が見えた。近付くとそんな鐘楼とお似合いの教会がある。英ガイドの地図を参照すると、聖アナスタシオス教会だ。1602年の創建と記されていた。

雰囲気に惹かれて内部が見たくなった。建物の規模は、幅が15メートル、奥行きが30メートル程度だろうか。信仰の場として信徒からの支持が篤いようで、訪れる人が引きも切らずだ。その数たるや規模として遙かに勝る聖母被昇天大聖堂と比べても遜色ないように感じられる。旅人の一瞥だけだから当てにはならないが。

イコンの画像は概ね好みに合わないが、このマリア像はいいと思う。キリストの顔は、ガラスの反射で無残だが。

この教会では撮影が可能だった。それも(記憶は曖昧だが)領収書や金額のメモもないことからすると、無料だったらしい。ちなみにブルガリア人は領収書が好きなのか、ほとんど全ての支払いに対して発行される。

ブルガリアで訪れた五つ目の教会だが、これまでと違って違和感なしで場の雰囲気に馴染むことができた。キリスト教徒で

イコノスタシス。

バスタオルで折った犬。

はなく、ましてや正教には全く縁がないから、祈りを捧げるような気持ちにはならないけれど、「この場所を大切にする人々の意識」には、幾分共感できるのだろう。

いつもより若干長く堂宇内にとどまったものの、それでも10分強が限界で、聖アナスタシオス教会を出る。

ぶらぶら歩いても10分ほどで宿へ戻り着いた。部屋に入ってみると、ベッドの上におかしなものが置いてある。バスタオルを折りたたんで作った犬だ。目玉を表現するのに、サングラスを掛けさせている。これは私のもので、出かけるとき曇りだったからケースに入れてサイドテーブルの上に置いといたものだが、それを持ち出して犬を完成させている。

部屋に備え付けのパーコレーター。コーヒー粉はどうするのだろうか？

カメラアングルを替えながら、この犬を10枚撮影し、これで満足して犬をばらしてしまった。後で、「折り方の手順を、ばらしながら撮影して置けば良かった。」と思ったが、後悔先に立たずだ。

６．ヴェリコ・タルノヴォ(Велико Търново)

ヴェリコ・タルノヴォ行き列車

11月８日も、曇り空の朝を迎えた。昨日同様、一階のカフェで朝食を済ませ、9時半にチェックアウトする。二泊で120Lv(6,590円)を、クレジットカードで支払った。

今回の旅で、移動経路に関する大雑把な構想は、まず東端まで一気に行き、それから興味を惹かれたところを訪ねながら、徐々に西へ戻ろうというものだ。ほぼ東端の三箇所、ブルガス、ネセバル、ヴァルナが終わり、若干西へ戻ったヴェリコ・タルノヴォが今日の目的地となっている。

この街への移動手段としては鉄道以外に、英ガイドによれば長距離バスも利用可能だ。所要時間はどちらも4時間程度。

徒歩10分足らずで駅に着き、Veliko Târnovo と記しておいたメモを見せて切符を買う。料金差は大してないはずなので、一等車にしてみた。料金は16Lv(879円)、渡された切符は3枚だ。PCから印刷された三枚続きは、それぞれの意味を推測すれば、一枚目が目的地まで363キロの乗車券で12.5Lv(686円)、二枚目が一等券で3Lv(165円)、三枚目が座席指定券らしく手書きでＡ８６との記載があり０.５Lv(27円)。

比較的短距離を走る通勤列車的車両らしい。